

日本女子大学の 平和教育



「平和な世界の構築」を教育の最終的な目的とした
日本女子大学創業者・成瀬仁蔵は、
その実現を女性の力に期待しました。



活動内容

「平和の集い」開催

「平和な世界の実現」への思いを深めることを目的に、毎年12月に開催しています。



小笠原サマースクール開催

大自然の中で生命を慈しむ心を育ててもらいたいと、小学生から大学生までの幅広い年代を対象としたサマースクールを開催しました。



アフガニスタン女子高校生招聘

アフガニスタンから女子高生を招き、ホームステイ、交流イベントなどを通して、互いに文化や思想、価値観などを学ぶ活動を行っています。

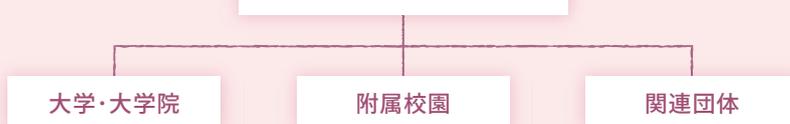


「平和の集い実行委員会」の発足

日本女子大学関係者有志が2003年に「平和集い」を始めたのがきっかけとなり、その後、総合研究所での平和教育研究として引き継がれ、2014年には「平和の集い実行委員会」が組織されました。

平和の集い実行委員会は、今後も平和の集いの企画・実施を行い、本学園で取り組まれている平和教育活動に協力していきます。

日本女子大学 平和の集い実行委員会



平和の集い実行委員会

委員長	住居学科 平田 京子
顧問	学 長 佐藤 和人
代表窓口	名誉教授 久保 淑子
	E-mail : 2003heiwa@gmail.com

平和の集い 2003年～

毎年12月に児童・生徒・学生・卒業生、そして平和に関心をもつ人々が集い、「平和な世界の実現」への思いを深めます



会場は毎年幼稚園児が描く「仲良く手を繋ぐ子どもたち」で飾られます



小・中・高生の合唱で「平和の集い」が始まります

1年間の活動および体験を発表します

2008年 発表の様子



附属小学校 児童による発表
「小笠原サマースクールに参加して」



附属中学校 生徒による発表
「自然と環境を考える」



附属高校 生徒による発表
「アフガニスタン高校生との10日間」



日本女子大学 学生による発表
「目白祭での発表展示・講演会について」

毎年講師をお迎えしお話を聞き、新たな感動と力を得ます



新妻 香織さん

2009年 / 2011年

エチオピアで少年たちにいじめられていたふくろうのフー太郎。助けた新妻さんはラリベラでふくろうの住める森作りをはじめ。森は再生し、エチオピア、日本両国の支援事業に(2009年)。そして3.11、故郷相馬市が壊滅状態に。新妻さんはふるさとの復興活動を開始。自分たちの手で電気をつくる、福島市民発電を設立(2011年)。



工藤 浩美さん

2009年

マザー・テレサの娘と呼ばれた、工藤浩美さんのお話
「小さな幸せを振りまく小さな人」



海南 友子さん

2012年

映画監督海南友子さんによる講演
「3.11 フクシマ—命を考える 人間として映画監督として母として」
映画「フクシマ 悲しい春」の撮影中、海南さんの妊娠がわかった。100年後を思い、今日を考える。



山田 洋次さん

2013年

山田洋次映画監督を囲んで生徒・学生達との座談会を開催。
監督からのメッセージ…
「戦争なんか終わりそうにない世界の中で平和を発信し続けて欲しい。賢くなって欲しい。」

成瀬仁蔵の平和思想は、今も学園全体に息づいています

一般社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会(卒業生団体)、婦人国際平和自由連盟(WILPF)と連携して活動しています



年齢や立場を越えてディスカッション



最後に参加者で合唱

命の鼓動を肌で感じ、生命を慈しむ心を育む 小笠原サマースクール 2008年～

2008年に、小学5年生から大学生までの希望者が小笠原へ行くサマースクールが始まりました。圧倒的な自然の中で、命の尊さを感じる様々なプログラムを経験し、毎晩行われるシェアリングでは、日々の感動とともに熱く深い思いを語り合いました。「全ては繋がっているんだ—現在と過去、未来も。私たちの生活と遠く離れた小笠原も。」と語る小学生…異年齢の多様な感性を共有することで新たな刺激を受け、「平和」についての思いを深めました。



圧倒的な自然の美しさを体感する



ウミガメ飼育と放流体験



戦跡トレッキング
& 戦争体験者の方のお話



お互いの考えを知り合う
シェアリング

世界と日本の架け橋となる感性を育む アフガニスタン女子高生招聘 2006年～

附属高等学校では、2006年より隔年でアフガニスタンから女子高生2名、引率教員1名を2週間招聘しています。滞在中は本校生徒の自宅にホームステイし、学校生活を共に過ごします。総務平和係を中心に有志生徒たちが様々な交流イベントを企画し、お互いの文化や思想、価値観を学びあいます。育った環境や文化は違っても、同じような喜びや悩みを抱えていることを知り、生徒たちは毎回新鮮な驚きに包まれます。

最後には一人一人の、そしてお互いの国の平和を祈り、涙を流しながらのお別れとなります。深い交流を通して得た異文化理解の体験は、生徒たちにアフガニスタンだけではなく、世界と日本の架け橋となる「感性」を育みます。



歓迎会



放課後に行った「アフガニスタン料理の会」

日本女子大学創立者成瀬仁蔵の平和思想 —世界と繋がって

成瀬とWILPF

当時スコットランドにあったWILPFの事務局は、アジア諸国の女性が結成大会に出席していないと気づき、早速、日本の女性への働きかけを始めた。

「戦後すぐにWILPFの大会開催を予定しており、アジア諸国からの女性の出席を求めている」旨の書簡と次期大会への招待状を10数余の女子高等教育に携わる女学校(女学校)の校長宛に送付した。成瀬仁蔵も招待状を受け取り、日本の女性の参加を支援したい旨の返事を出した。(右図)

まもなく成瀬は病に倒れ、親友の新渡戸稲造にその後の対応を依頼し逝去した。成瀬の思いは、教え子であり新渡戸の助手を務めていた上代タノ(日本女子大学卒業生、後に学長)に引き継がれた。

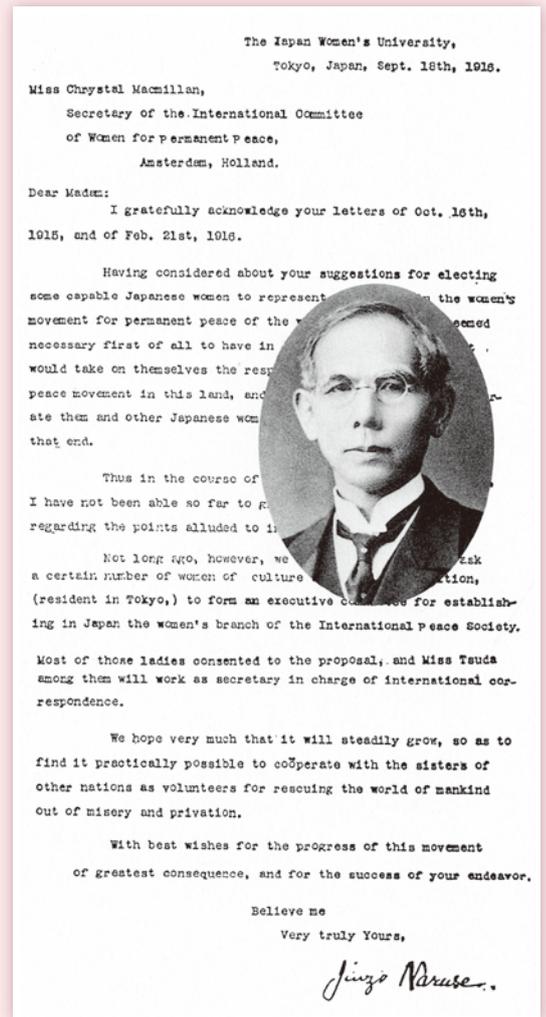
成瀬の女子大学創立構想は、「女性が個の立場で、また女性団体を通して、世界平和のために活動すること」を基本としていた。

成瀬の女子教育論の核には、「平和と人権」を重視する「人間教育論」が存在する。日本の女性が世界平和実現のために世界の女性達と共働することは、まさに成瀬の残した精神であり、その精神は日本女子大学の教育に今なお息づいている。

それはWILPF日本支部が日本女子大学内に拠点を置き、多くの卒業生達が活躍していることでも実証されよう。とりわけ注目されるのは、上代タノの活躍である。

第二次世界大戦中、学徒動員で働かされている学生達に付き添った上代は、工場の昼休みに「国際言語」の英語を教えることを止めなかった。当初、監視の陸軍将校はこれを良しとしなかったが、やがて、自ら進んで学生とともに上代から英語を学んだ逸話は有名である。

戦後、WILPFの日本支部を再興した上代は、『婦人と平和』を月刊として発行し、平和活動とその精神を熱心に世に普及した。またノーベル賞学者、湯川秀樹博士の「世界平和アピール7人委員会」に請われて委員となり、核兵器廃絶を熱心に訴え続ける一方、WILPFの国際本部理事としても活躍した。成瀬の精神を見事に体現した成瀬の教え子、上代タノの行動に、私達は今なお多くを学び、平和な世界実現に努めていきたい。



1916年9月18日付 成瀬のWILPFへの返信

出典：中島邦・杉森長子(2006)

『日本女子大学叢書1 20世紀における女性の平和運動
—婦人国際平和自由連盟と日本の女性』
株式会社ドメス出版

婦人国際平和自由連盟(WILPF)の歴史

- 1915年、第一次大戦中、中立国、オランダのハーグに欧米12カ国、1,136人の女性参政権運動活動家(女性)達が参集した。この女性達は、「戦争中止と平和の確立」を決議して、諸国に休戦を呼びかけた。戦争中は、事務局(「国際女性委員会」)を英国に設置し、戦後の活動の準備をしていた。
- 1919年、終戦後ただちにこの女性達はスイスのチューリッヒに再び参集し、二回目の大会を開催、恒久的な女性の平和団体として正式名称を「婦人国際平和自由連盟(WILPF)」と決め、各国に支部を設け、今日まで国際的な平和活動を展開をしている。
- 現在 WILPF は、国際本部と事務局をスイスのジュネーヴに、また世界40ヶ国に支部を置き、世界平和構築と人権問題解決に尽力している。
- 2015年、WILPFは設立100周年を迎える。